

評論

いわかみじゅんいち
岩上順一

山口市
(1907～1958)



【著作】

『文学の饗宴』（昭和16・大観堂）
『横光利一』（昭和16・三笠書房）
『「戦争と平和」論』（昭和21・河出書房）ほか

岩上順一は、明治四十年（一九〇七）、吉敷郡小郡町柳井田（現・山口市）に生まれる。「順一は小さい時から大の読書家であった。父親が田畑の手伝いをさせようとして、兄に捜させたところ、長屋の前の庭で、ワラを立てかけて、その中で本に読みふけていたという。家が貧乏なので、正規に中学校に行けず、当時山口市にあった夜学校、鴻城実践中学校に十余キロの道を通った。上京してからも苦学して大学や外語学校に学んだ。」と、『防長文学散歩』（和田健著）に書かれている。また、『岩上順一追想集』（『変革期の文学』所収）に、共に文集を発行した清水忠夫が手記を寄せて、次のように書いている。「順一君の家の前に小川をはさんでわら屋根の半分をおおうほどの無花果の木があった。家の裏手が鉄道線路になっていて、それに向いて三畳の天井の低い光の入りにくい部屋があり、毎夜のように訪れて二人で詩や人生を語った。やがて小泉喜代一や奈良幸夫を知り、文集を発行したり文学を語りあった。」

第二早稲田高等学院・早稲田大学在学中、朔太郎やトルストイに傾倒し詩や小説を発表するが、やがてブハーリンなどのマルクス主義文献を読み、深く影響を受ける。十九世紀のロシア文学批評家ゴリキーやベリンスキーの影響も大きく、後にその訳書を多く出している。

昭和十三年（一九三八）に東京外国語大学に編入後、『中央公論』に「祖国と愛情」を書き、翌年同誌に「政治と文学」を発表して話題を呼び、次々と文芸評論を展開していった。昭和十六年（一九四一）に出された第一評論集『文学の饗宴』には、「祖国と愛情」以後の二十四編の文学論・作品論が収められている。「歴史文学論」「戦争と平和」論は「人間の確立」「文学の眺望」他、多数の著書がある。彼は「人間の確立」のあとがきの中で、「文学の究極の目的は人間の確立である。人間を確立する道をまなびとるために、文学は人生と社会の真実をさがしもとめてやまないのだ。」と書いている。昭和十年代から二十年代にかけて、マルクス主義文芸批評を精力的に展開した評論家としての功績は大きい。

実家の兄は元憲兵少佐で、戦時中は彼の非合法活動のためにずいぶん心痛したらしい。老母の泣訴で一時は転向を誓ったこともあるが、結局は思想を曲げることはなかった。こうした事情で、山口県にはそう度々は帰って来なかった。しかし、彼の葬儀の時、主義や主張や国境をこえた弔問が数多く寄せられたという。彼はふるさとの泉福寺墓地に妻の淑子とともに眠っている。

（監修・野村忠登）

「うつくしい祖国を
こころうつくしい人々で
すみからすみまで
みたしていこう」
（墓碑に刻まれた言葉）



墓碑（山口市小郡） 提供・民報社



著作

岩上順一 年譜

（監修・野村忠登）

明治40（一九〇七）年	明治44（一九一〇）年	大正10（一九二〇）年	大正12（一九二二）年	昭和2（一九二七）年	昭和4（一九二九）年	昭和5（一九三〇）年	昭和9（一九三四）年	昭和11（一九三六）年	昭和12（一九三七）年	昭和13（一九三八）年	昭和14（一九三九）年	昭和15（一九四〇）年	昭和16（一九四一）年	昭和17（一九四二）年	昭和18（一九四三）年	昭和20（一九四五）年	昭和21（一九四六）年	昭和22（一九四七）年	昭和23（一九四八）年	昭和24（一九四九）年	昭和25（一九五〇）年	昭和29（一九五四）年	昭和30（一九五五）年	昭和32（一九五七）年	昭和33（一九五八）年	昭和34（一九五九）年
四歳	一三歳	一六歳		二〇歳	二二歳	二三歳	二七歳	二九歳	三〇歳	三一歳	三二歳	三三歳	三四歳	三五歳	三六歳	三八歳	三九歳	四〇歳	四一歳	四二歳	四三歳	四七歳	四八歳	五〇歳	五一歳	

吉敷郡小郡町柳井田（現・山口市）に、父野村九左衛門、母ツイの四男として生まれる。養子になる。（七歳で生家に戻る。）
小郡小学校高等科卒業後、小郡変電所勤務。
東京の中学に編入するが、関東大震災に遭い、帰郷。
山口鴻城中学夜間部に編入、大正14年卒業。母の始めた練炭屋を手伝う。
その頃から近所の仲間と文集を発行し、詩や小説を発表。
第二早稲田高等学院入学、松下英麿、畑中繁雄らと同覧雑誌「すばる」を作る。
早稲田大学英文科入学。
文学にかかわる中で、マルクス主義に同調し、共産青年同盟に協力する。
検挙され、本富士署に勾留中に、遠縁の岩上家に籍を移される。
3度目の検挙。翌年転向を誓い、出所。
3月、植松淑子と結婚。4月、日刊工業新聞社編集部勤務。
ストライキに参加して退社、石油精製業連合会に転職。7月、父死去。
石油共販株式会社に勤務。4月、東京外国語大学露語科入学。
8月、『中央公論』に「政治と文学」を発表して注目される。引き続き、同誌の文芸時評欄を担当する。
東京外国語大学露語科専修科を卒業。『中央公論』の他、『知性』『文学者』『現代文学』などに、文芸評論や翻訳をあいついで発表。
1月、処女評論集『文学の饗宴』（大観堂）刊。『横光利一』（三笠書房）刊。
1月、書き下ろし評論集『歴史文学論』（中央公論社）刊行。
6月、治安維持法違反で検挙、翌年出所。石油配給統制株式会社に復職。
4月、空襲により牛込の自宅を焼失。10月、日本共産党に入党。
新日本文学会の結成に尽力し、初代書記長になる。（昭和23年まで）
『「戦争と平和」論』（河出書房）刊。
『評論集人間の確立』（萬里閣）『文学の虚実』（玄理社）『文学の眺望』（十月書房）等刊行。
『階級芸術論』（雄山閣）刊。『民主主義文学運動』（新日本文学会）編集。
3月、母死去。
4月、日ソ親善協会常任理事に就任。
訪ソ、訪中。『作家論』（ゴリキー）翻訳（みすず書房）刊。
『モスクワ・北京・文学の旅』（河出書房）刊。8月、日ソ図書館主事就任。（32年8月）
『世界少年少女文学全集』第2部（ロシア編）翻訳（東京創元社）刊。他多数の翻訳あり。日ソ協会が設立され、常任理事となる。
8月14日、脳腫瘍で永眠。
7月、『変革期の文学』と題して、「岩上順一追想集」とあわせて三一書房より刊行。

『日本近代文学大事典』（講談社）『現代文学大事典』（明治書院）
『新潮文学辞典』（新潮社）『防長文学散歩』（和田健・白藤書店）参照

横光利一の最近の長篇「旅愁」のなかで、主人公の一人矢代は、シベリアの旅の終、列車が満州里に着く直前このやうな昂奮にとらへられた。ただこれだけのことなら、長い旅行者が、旅路の終りに感じる切なさだとも言へよう。しかし、主人公矢代が、このやうに日本を「良い國」だと感じるのは、單に旅行者の感慨だとは言ひ切れないものがある。下關からの登り列車のなかで「總體が氣忙しく立ち廻り、入り亂れてゐるにも拘らず、それぞれ何の間違ひもなく無事安泰に流れてゆくやうなその感じは、見てゐても胸の空くほど凄じい勢ひだった。それはもう西洋でもなければ東洋でもなかった。まさしくこれこそ世界で類のない生の躍動そのもののやうな日本だと思つた。」と矢代が感じるのにも、何か特別な意味が含まれてゐるやうに思はれる。繰りかへして「彼は車窓から乗り出すやうにして、自分の國は世界で一番幸福な國だと思つた。」と書いてあるのにも何か意味があるやうだ。私はここで、その意味について考へてみたい。

元来、ここに登場して來た矢代といふのはどんな人物なのであらう。私はそれをこれから追及してゆくまへに、この矢代という人物は、作家横光利一の中に巢喰つてゐる一つの思想、即ち日本的倫理の特殊性に關する作家の思想の負託者ではないか、と言つておかう。注意ぶかく「旅愁」を讀んだ人には、そのことについて、私が殊更に説明するまでもないであらう。

（「横光利一」より抜粋）